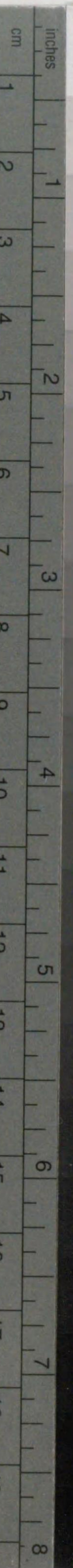


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



十 二 禮

内 田 晧 融

十二禮

內田 暁 融

目次

一、十二禮本文	三
二、序 說	七
一 本偈の傳譯	七
二 本偈の作者	二
三 本偈の組織	三
三、正 說	一六
(一) 總 讚 禮	一六
一 至心歸命	一六
(二) 別 讚 禮	一六
イ 主 佛 讚	一六
二 進止安平の徳	一六
三 面容圓善の徳	一六
四、附説 宗教の本質と禮拜	三
四 威光折伏の徳	三
五 溫容攝受の徳	三
六 住持成就の徳	三
七 華臺妙淨の徳	三
ロ 伴 衆 讚	三
八 顯現神通の徳	三
九 爲衆說法の徳	三
ハ 國 土 讚	三
十 不聞惡名の徳	三
十一 往生不退の徳	三
(三) 結 嘆 文	三
十二 自利利他の徳	三

一十二禮本文

龍樹菩薩願往生禮讚偈

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

稽首天人所恭敬 阿彌陀仙兩足尊

在彼微妙安樂國 無量佛子衆圍繞

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

金色身淨如山王 奢摩他行如象步

兩目淨若青蓮華 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

面善圓淨如滿月 威光猶如千日月

一十二禮本文

聲如天鼓俱翅羅 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

觀音頂戴冠中住 種種妙相寶莊嚴

能伏外道魔憍慢 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

無比無垢廣清淨 衆德皎潔如虛空

所作利益得自在 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方名聞菩薩衆 無量諸魔常讚嘆

爲諸衆生願力住 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

金底寶間池生華 善根所成妙臺座

於彼座上如山王 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

十方所來諸佛子 顯現神通至安樂

瞻仰尊顏常恭敬 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

諸有無常無我等 亦如水月電影露

爲衆說法無名字 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼尊佛刹無惡名 亦無女人惡道怖

衆人至心敬彼尊 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

彼尊無量方便境 無有諸趣惡知識

往生不退至菩提 故我頂禮彌陀尊

願共諸衆生往生安樂國

南無至心歸命禮西方阿彌陀佛

我說彼尊功德事 衆善無邊如海水

所獲善根清淨者 回施衆生生彼國

願共諸衆生往生安樂國

二 序 說

一、本偈の傳譯

本書は印度西天（西天）の論家（論家）、龍樹菩薩の作られたる阿彌陀佛の威徳を讃嘆せる偈頌（偈頌）であつて、十二聯の讃禮文より成る處から普通に「十二禮」と稱せられてゐるが、「龍樹讚禮阿彌陀佛文」「龍樹菩薩願生禮讚偈」「願生禮讚偈」とも稱せられてゐる。

抑、「偈」といふは具さには偈陀（偈陀）又は伽陀（伽陀）と音譯される梵語のガートハー（Gāthā）といふ文體をいふのである。元來、「偈」は韻を踏んだ讚詩にして、しかも、普通に四句が一聯となつてゐる。それで原文では必ず各句が押韻した正確な句法に合せて誦出された美文的の韻文詩である。それで、漢譯の文でも矢張り句法を整へる必要があるから、すべて譯文の偈文は字と句とを揃へ、その爲めに往々無理な字の使ひ方がしてあるので意味の解し難い場合も多々ある。

佛教の諸經論中に散在する大抵の偈頌には、その前後に長行即ち普通の散文體で説述した章句が附いてゐて、それに連る偈文はその散文の章句の意を要約して謳歌讚嘆せる部分となつてゐる。然るに此「十二禮」の文は偈

頌のみが單獨に傳へられてあるから、此偈は初めから獨立の偈であつたか、それとも或る長行の章句の中に挿入されてあつたものを、抄出して獨立の偈頌として傳へたものは今の處不明である。然るに此偈の文意が龍樹菩薩の著作に係る『易行品』の彌陀章のそれと似通ふところがあるといふので、彼「彌陀章」の別譯ではないかとも想像されてゐる。併し、その想像の當つてゐないと思はるゝことは後に述べたいと思ふが、たゞ不審な點は、本偈は他の諸經論と異なり、獨立の譯文としては極古き經論集には出てゐない。のみならず、それが最初に紹介されてあるものが、唐の太宗高宗時代の人にして、長安の弘法寺に住して専ら淨土の業を修めてゐたと傳へらるる迦才法師かさいほふしの著はせる淨土論の中卷に「引聖教爲證」と題して、淨土に關する重要なる教證として、十二經、七論の文を引用せる條下に

如禪那囉多三藏別譯龍樹讚禮阿彌陀佛文有十二禮、至心歸命禮西方阿彌陀佛

と標示し、以下に十二禮偈の本文を列記せるものである。その外、善導大師はその著『往生禮讚』にこの全文を出し、智昇法師は『集諸經禮讚儀』に載せてゐるが、何れも引用の文に過ぎない處から、本偈の獨立性を疑へる者もある。特に迦才の引用文中に、禪那囉多三藏別譯云々の字句ある處より、本偈は他に異譯の本文があつたのではないか、と思はるゝ點もあるがそれも今の處では全く判然せない。

以上の如き事情の下に、本偈は初めから單獨の形で知られてない處から、その標題も一定してゐない様である。

迦才に従へば

「龍樹菩薩讚禮阿彌陀佛文」

又は

「十二禮」

と稱すべきであるが、善導大師はその引用せる『往生禮讚』の中には

龍樹菩薩願往生禮讚偈

とし、智昇法師は『集諸經禮讚儀』に

願生禮讚偈

と題してゐるから何に従つて呼ぶも勿論不可はないと思ふ。それは本來此偈頌は龍樹菩薩の阿彌陀佛に對する至心歸命の純真なる心情を吐露せる禮讚歌であるから、その表情の文意からいへば「讚禮阿彌陀佛文」であり、その衷心の動機に就ていへば「願往生禮讚偈」又は「願生禮讚偈」であり、又その恭禮の態度からいへば「十二禮」といふべきである。思ふに、本偈が特に十二の禮數を列ねて讚歎の頌とせるは必ずしも偶然ではあるまい。蓋し十二の數は晝夜六時の和數にして、龍樹菩薩が晝夜を問はず、二六時中に常恭敬、常稱名せられた意を表はしたのではあるまいか。宗祖が和讚に龍樹菩薩を讚して

本師龍樹菩薩の

をしへをつたへきかんひと

本願こゝろにかけしめて

つねに彌陀を稱すべし

と勧められたのは、その意此にありとして深く味ふべきである。

此の如く龍樹菩薩は易行品彌陀章の中に於て念佛易行の法を勸説し、西方願生の意を述讀してゐられながら、それと又 別個に獨立の本偈頌を造られた本意は、蓋し彼易行品中の彌陀稱讚の文は彼品中に同時に述べてある諸佛に對する讚嘆に加へての彌陀に對する別讚に過ぎないのであるから、いはゞ諸佛對彌陀の相對讚である。然るに衷心彌陀一佛を專念する龍樹菩薩の衷情は諸佛を超へたる彌陀に對する絕對讚の誦出の止み難きものがあつて、遂に彌陀特讚の偈頌として本偈が誦出されたのではあるまいか。若し然りとせば、此十二禮偈こそ龍樹菩薩の衷心赤裸の彌陀禮讚の告白文にして、菩薩が彌陀法の絕對歸依者たることを證するものであつて、従つて本讚が廣く西方願生者の間に諷誦讚詠せらるゝ所以であらう。

尙本偈の譯者、禪那嘔多ぜんなゑたが如何なる人であるかに就ては、何れの僧傳にもその名前すら見當らないから、何時頃の又何處の人であるか一切不明である。然るに殆んど同名の閻那嘔多 (Jainagupta) 即ち德志として知らるゝ經論の翻譯家があるから、多分同じ人ではないかと云つてゐる學者もある。德志は犍陀羅 (Gandhara) 國即ち持地國 (又は香淨國と譯す) と稱する印度カシユミールの西北、即ちパンジャップの北に在つた國の人であつ

て、周の武帝の世 (西曆六世紀の中頃) に長安の都に來り、大興善寺に於て諸經論、三十七部百七十六卷を譯し、壽七十六にして卒つたと傳へられてゐる。

二、本偈の作者

本偈の傳來に就ては略ぼ上に述べ終りたれば、以下本偈の作者及譯者に就て少しく述ぶることにする。

本偈の作者である龍樹菩薩は宗祖が

南天竺に比丘あらん

龍樹菩薩となづくべし

有無の邪見を破すべしと

世尊はかねて説きたまふ

と讚詠してゐられる通り釋尊の懸記けんき即ち豫言に應じて、佛の滅後七百餘年 (異説あり) 頃に出世して、正法に對する異見邪義を破し、大乘の教意を宣説し、淨土の妙教を開闡ひらくせられた大菩薩である、故に宗祖は

本師龍樹菩薩は

大乘無上の法をとき

歡喜地を證してぞ

ひとへに念佛すゝめける

と稱嘆してゐられる。

さて龍樹の梵名はナーガールジュナ (Nāgārjuna) (那伽樹那、那伽闍刺那、那伽阿順那等と音譯す) にしてナガ

(Nāga) とアルジュナ (Arjuna) との合成語である。ナガ (Nāga) 即ち「那伽」は蛇の大なるもので世間に普通言ふ所に従へば「龍」である。次のアルジュナ (Arjuna) に就ては諸ろの異説がある。即ち「アルジュナ」は印度に於て古來傳はる人名としての固有名詞であるとか、或る樹木の名稱であるとか、或は又「徳明」といふ様な人間の性質を言ひ表はす語だとか傳へられてゐる。従て漢譯の名稱として龍樹、龍勝、龍猛の三名が用ひられてゐる。中に就て最も普通なるは龍樹である。

龍樹菩薩の出生の地は南印度であるといふ説と、西印度であるといふ説との兩説があつて決定してない。又その出世の時代も不詳であるが、普通佛滅後七百年頃だと傳へられてゐる。

龍樹菩薩は幼くして極めて聰明穎悟であつて、夙に當代の學に通じ、初めは人生の享樂に耽つて頗る放縱の生活を營んだ人であつたが、後、翻然として出家し、初めは小乗の三藏を學んでゐたが、後に大乘の經典を讀んでその奥義に達し、佛の滅後に於て最初の眞佛乘を宣揚した人である。その著はす所の論説極めて多く、世に千部の論師と稱せらる程であるが、中にも大智度論百卷、十住毘婆娑論十七卷、中觀論四卷、十二門論一卷等はその重なるものである。龍樹菩薩は此等の論説に由て大乘の奥旨を宣揚し、特に、十住毘婆娑論の第五篇たる易行品に於て、佛法に無量の法門あるも之を難行道と易行道との二門に分つことを得るとし、信佛の因縁による往生成佛の法を以て易行の大道とし、躬自ら願生淨土の念佛易行を修し、深く淨土を欣慕する餘り、彌陀を稱歎する三十二頌一百二十八句の禮讚偈を作つて普く諸人に向て西方の願生を勧めてゐられる。故に宗祖は

龍樹大士世に出で、

難行易行の道をしへ

流轉輪廻のわれらをば

弘誓のふねにのせたまふ

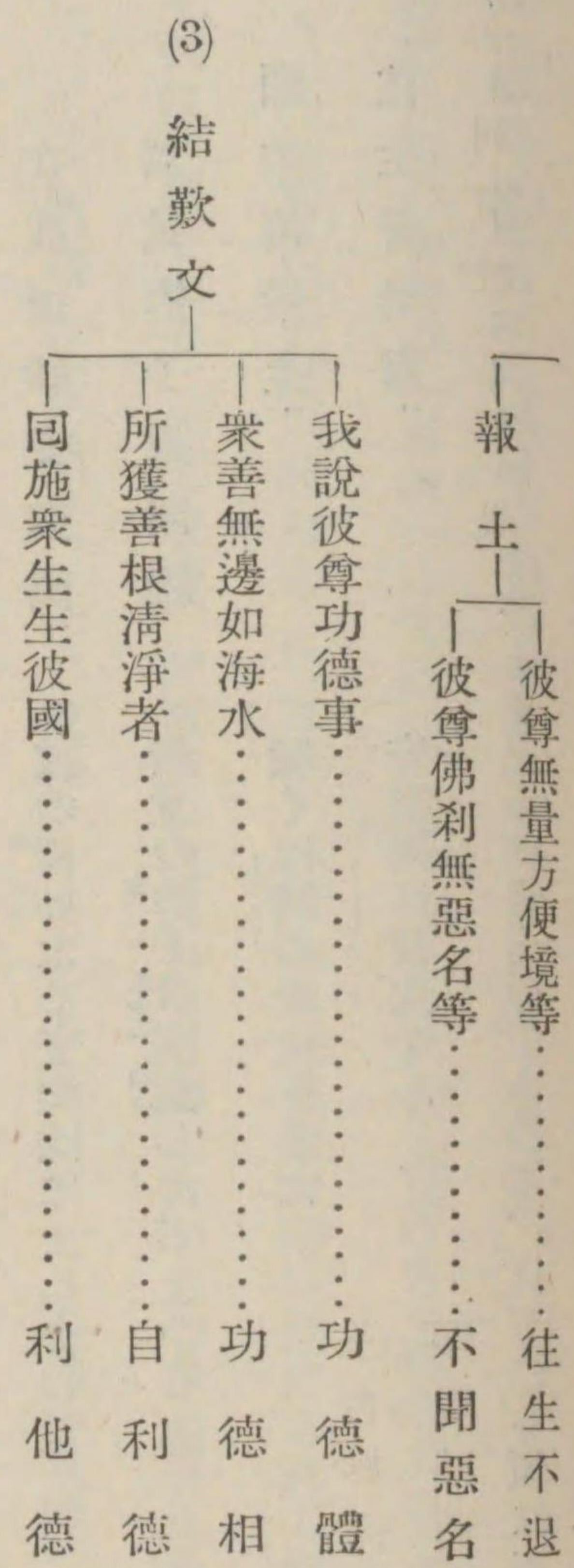
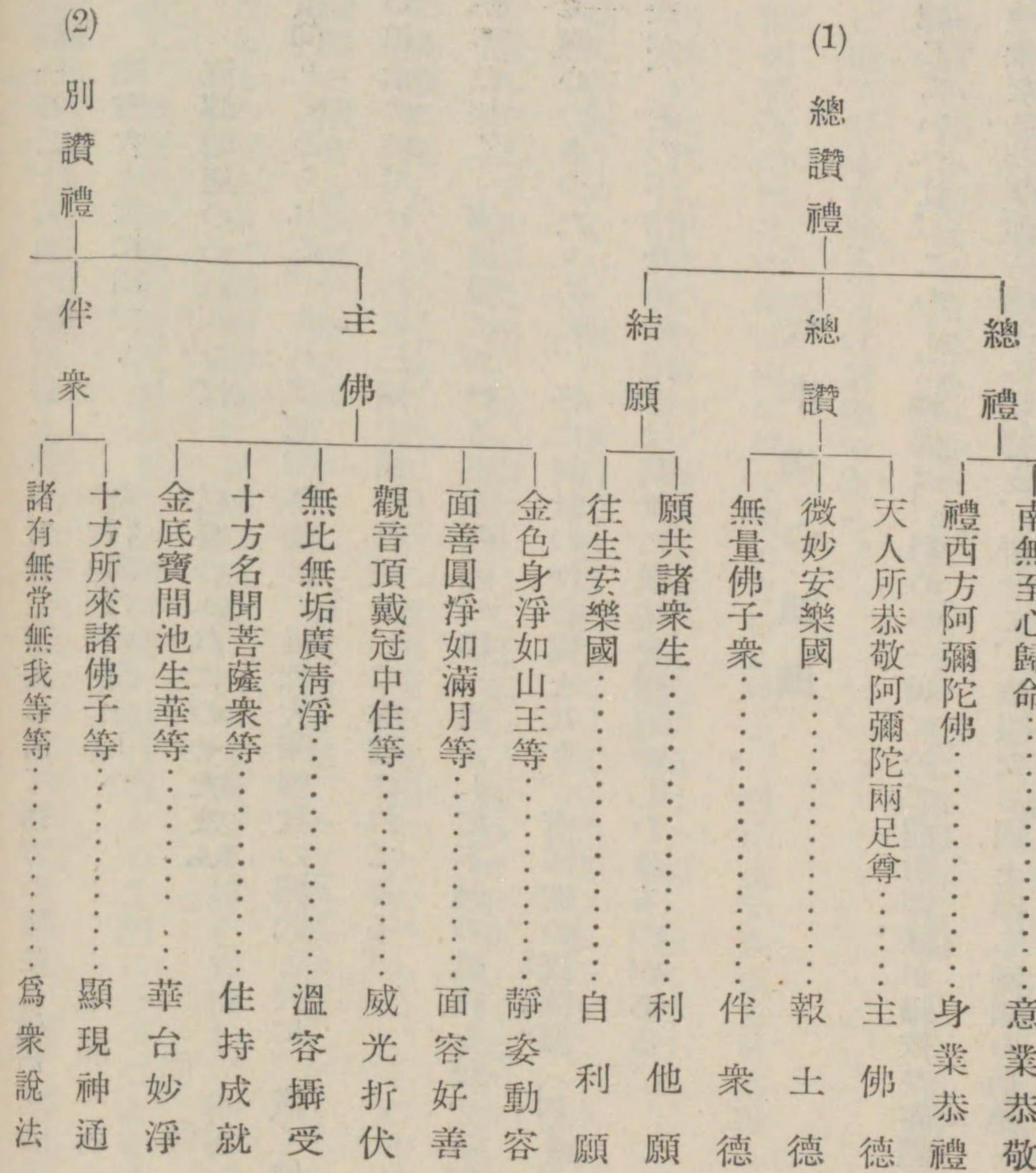
と讚仰してゐられる。されば龍樹菩薩は、後世大乘佛教の興起と共に、廣く佛教八宗の通祖と仰がれ、我淨土眞宗の相承に於ては、特に三國七祖の首祖として尊敬されてゐる。

かくの如く、佛滅後に於ける正法弘通の第一祖として不滅の偉績を残せる龍樹菩薩は餘りに道を弘めたまふことに熱心であつたために、終に異教の憎む處となり、南印度の憍薩羅 (Kosala) の都に於て殉教の最後を遂げられたが、その不惜身命の道念は萬世に教徒を奮起せしむるものがある。

三、本偈の組織

總じていへば、この十二禮偈は、初めの一頌に於て龍樹菩薩が歸依の客體である主佛の阿彌陀佛と、その隨伴の聖衆たる菩薩即ち佛子の功德と、併せて、依報たる國土即ち佛國の功德とを讚嘆し最後に結願廻向の一頌を以て結嘆せられてある。しかも各句の冒頭に「至心歸命禮西方阿彌陀佛」といふ歸命の禮と、各句の末尾に「願共諸衆生、往生安樂國」といふ願生の文とが附せられてある。而して、第二頌以下第七頌までに主徳即主佛たる阿

彌陀佛の徳を別讚し、第八及第九頌に於て伴徳即ち隨伴の菩薩の徳を別讚し、第十及第十一頌に於て報徳即ち報土たる佛國の徳を別讚してゐられる。今試みに總頌の内容を組織的に圖示せば次の如くである。



三 正 說

一 總 說

一、至 心 歸 命

南無至心歸命

南無至心歸命して

禮西方阿彌陀佛

西方阿彌陀佛に禮したてまつる

稽首天人所恭敬

天と人とに恭敬せらるゝ

阿彌陀仙兩足尊

阿彌陀仙兩足尊に稽首したてまつる

在彼微妙安樂國

彼の微妙なる安樂國にましまして

無量佛子衆圍繞

無量の佛子衆圍繞したてまつる

願共諸衆生

願くは諸の衆生と共に

往生安樂國

安樂國に往生せん

此一聯の句頌は本讀禮偈の總序とも見るべきものであつて、以下の各頌は本頌の内容を分別列讀したものであ

る。先づ總禮の文より始めて以下順次に解説することにする。

總禮の句の劈頭の「南無」は梵語 *Namas* (ナマス) を音譯せる漢字であつて原語の *Namas* (ナマス) は *Nam* (ナム) (「腰を屈がむ」「拜む」) に *as* (アス) なる接尾語を結び付けられて出來た語であるから、元來は尊敬の意を表はす語である、從て敬禮、歸敬等の語に由つて譯されてゐる。慈音法華玄贊四には、「ナマス」の原語に就て、正言_ニ納慕_ニ亦言_ニ納莫_ニ、此云_ニ敬禮_ニといつてゐる。併し、元來「敬禮」は「敬意」の表現であるから、「敬禮」を表はす言葉は同時に「敬意」を表はす言葉として用ひらるゝは當然である。從て「敬禮」を意味する *Nam-* は「恭敬」の意を表はす語となり、「敬意」と「敬禮」との意味を有する語として「敬禮」と同時に恭敬、歸依、歸命等の意味を有する言葉として翻譯せられてゐる。

此くて「南無」の語は屈敬の儀禮を表はすと同時に歸依又は歸命の心情を表はすが故に、或る時は「恭敬」の意に、或る時は「禮拜」の意味に用ひられてゐる。而して一般的には南無の譯語としては「歸依」の語を用ゆるも淨土教典の多くには歸命の譯を用ひてゐる様である。是蓋し善導大師が六字釋の中に、「言南無者即是歸命」と釋せられたからであらうと思はれる。尙又、「南無」の原語は他の佛教用語の表現に於て屢見るところ、梵漢兩語を併舉連用の形に於て、「歸依」又は「歸命」の譯語と連結して「南無歸依」「南無歸命」の合成語として用ひらるゝこともあるようである。現に本頌に於て「南無至心歸命」といへるも同意の梵漢兩語を併舉せる一例で

ある。

次に「至心歸命」といふは「南無」の語の意譯であると思はる。從て迦才の淨土論及び智昇の懺儀には「南無」の二字は見當らない。さてその「至心」といふは「至極徹底の眞實心」であつて疑蓋ぎがい雜まじはることなき純無垢の心である。「歸命」といふは「歸順教命」の意にして佛命に歸し佛意に順ふことである。即ち絶對信順の心の態度である。此絶對信順の心の態度が身の態度の上に現はれるのが「屈敬」である。即ち下の「禮西方阿彌陀佛」の句はそれを表現してゐる。

「禮」は「恭敬心」の身的表現である。從てその表情の形式は一定してゐない。世間では叩頭も禮であり、傾首も禮であり、合掌も禮であり、握手も禮である。又場處に由つて相異なり、對者に應じて不同である。然るに東西を通じ、文野を並べて最も普通なるは掌を合すこと、腰を屈むることである。玄奘げんじやうの西域記には致敬之式其儀九等、一、發言慰問、二、俯首示敬、三、舉手高揖、四、合掌平拱、五、屈膝、六、長跪、七、手膝踞じ地、八、五輪俱屈、九、五體投地、凡斯九等。極唯一拜云云といつてゐる。要するに禮は先方の威徳に對する尊敬心と尊容に對する謙恭心の發表であるから、自ら屈拜卑謙の態度となつて現はるのである。

「西方」は阿彌陀佛のまします國土の方位であつて、大經には「現在西方去此十萬億刹」と説き、小經には「從是西方」と示してある。しからば何故に阿彌陀佛の在す處、即ち安樂淨土が西方に在りやに就ては古來から論議されてゐるが、今茲には議論を聞く必要もなければ、又議論を爲す必要もない。たゞ菩薩の純眞なる宗教心に映じたまゝを誦出されたものとして味へば足ると思ふ。

「阿彌陀佛」は龍樹菩薩の歸依の客體たる主佛であることは申す迄もない。元來「阿彌陀」は梵語の Amita (アミタ) の音譯にして、「不」又は「無」を意味する梵語の मि (ア) 即ち阿) と、「限量」又は「際限」を意味する梵語の mia (ミタ) 即ち彌陀) との合成語にして、「無量」即ち「計量することの出来ない」といふ程の意味である。從て單に「阿彌陀佛」といふ字面の意を解すると「無量の佛」といふ様な意味となつて「數知らぬ多くの佛」と解すべき様であるが、實はそうでなく、此場合、「阿彌陀」は佛の二大徳性である處の光明 (智慧) と壽命 (慈悲) の量りなきことを稱讚せる語であるから、「阿彌陀」はその次に「壽命」といふ Ayus (アユス) 即阿廋斯) と「光明」といふ Bha (ブハ) 即婆) といふ語が結び付た Amitayus (阿彌陀廋斯) 即ち無量壽と Amitabha (阿彌陀婆) 即ち無量光との二語の要約された語として、「光壽無量の徳を具する佛」の意である。即ち阿彌陀佛は無量壽なるが故に三世に亘つて衆生を救ひ、無量光を以て十方に於ける衆生を救ひ玉ふが故に「阿彌陀佛」と名けたてまつるのである。

「佛」は梵語 Buddha (ブッドハ) を漢字にて音譯せる「佛陀」の略字であることは人の知る處である。Buddha の語根は budh (ブッドホ) であつて「知る」「覺める」「悟る」等の意を持つ語である。それが文法上の變化、語

法上の規則で過去分詞が名詞となつて Buddha 即ち「知つてゐるもの」「覺めたもの」「悟つたもの」といふ語になつたのである、故に意味をとつて漢語に譯するときは普通に「覺者」といつてゐる。

又佛の徳を現はす言葉を以て佛の名前とし、普通十種の稱號が用ゐられてゐる。即ち、

- 如 來……………眞如より來り眞如に往く自在の徳ある意
- 應 供……………智徳圓備して世の供養に應ずる徳を具ふる意
- 等 正覺……………一切智を具し一切法を知り悉せる意
- 明 行 足……………智慧明かにして修行満足せるの意
- 善 逝……………智慧を以て惡を斷じ世間を超へ過ぎ行く意
- 世 間 解……………世出世の法に通達せる意
- 無 上 士……………惑業悉く斷ちて至上の位に在るの意
- 調 御 夫……………法を説いて一切の衆生を善く調伏するの意
- 天 人 師……………天と人と師たるの意
- 世 尊……………世間に尊重さるゝの意

である。然れども最も普通に用ひらるゝは、「如來」と「佛」と「世尊」である。

以上部分的に總禮の文を略解したが、之を總括して味へば

如來の至心により、如來の教命に順ひ、疑なく慮なく、全き身心を捧げて、西方安樂國に在す、無量

壽無量光の阿彌陀佛を恭敬し禮拜したてまつる

との意である。是が龍樹菩薩の宗教心の内外兩面に亘る全貌である。

次に總讚の文に就て解せんに、先づ冒頭の

「稽首」の語は第二句末の「尊」の字に及ぶのであつて、阿彌陀佛に敬禮したてまつるの意である。さて此に掲げてある「稽首」の原語は總禮の文の首めに在つた「南無」の語と同じ原語の譯であらうと思はる。それといふも「稽首」といふは「稽」は「至」の義にして「跪拜して頭、地に至るが故に稽首といふ」が故に、「稽首」は最深の敬意を表はす最上の敬禮であるから、「至心歸命」の正意を表はすことになるから、矢張り原語の「南無」に相當する様に思はる。

「天人所恭敬」は文勢によつて知らるゝ如く、「阿彌陀仙」に續く語であつて、敬はれる佛徳であつて、前掲の佛の十號中の「天人師」の徳を讚した語である。此に「天人」といふは「天人」と續けて讀むべき一語でなくて、天と人とに分けて讀み、即ち「天人所恭敬」の句は「天と人とに恭敬せらるゝ」と讀まねばならぬ。さて「天」といふは梵語の Deva (デーヴァ即ち提婆) にして十界の衆生の中で、第五位に在るものであつて、人間より一

段階上位の者である、「人」といふは梵語の Manushya (マヌシヤ即ち魔免舍喃)であつて普通の人間を指す。阿彌陀佛は無上道を志求して、諸天人の師と爲り給ふたのであるから十方の諸天人に恭敬される徳が具つてゐられることを明にした語であると同時に、阿彌陀佛は龍樹菩薩一人に恭敬さる方ではなく、十方の人天の恭敬したてまる人天の師たることを示されたのである。

「阿彌陀仙」といふは、佛を「大仙」又は「金仙」と尊稱することあるより、「阿彌陀佛」といふべきを特に「阿彌陀仙」と敬稱されたのであらう。「仙」とは梵には Rishi (リシ)といつて、昔し印度にて神と人との中間に在つて「讚歌などを歌ふ聖者」を指したものである。それが後には益尊まれて「非凡の聖者」といふ意味になり、俗塵を離れて専ら修行に身を委ねる人を指す言葉となり、即がて一般に敬稱の語となつたらしいのである。故に「阿彌陀仙」といふは「阿彌陀佛」を敬稱せる語と見て宜し。

「兩足尊」とは「二足中第一」と易行品偈に在るより見れば、「二本の足を持つものゝ中で一番尊いもの」との意である。世界の生類の中で蛇の如き足なきものもあり、牛馬の如く四足のものもあり、蟬や胡蝶の如く六足の者もあり、蜈蚣の如く百足の多數を持つものもあるが、二足のものといへば鳥と人間丈である。しかるに鳥には兩翼があつて飛行するのが本性であるから二足丈で歩行するものは先づ此世界では人間丈であると云つて宜しい。それに就て面白い話がある。それは昔し希臘の哲人プラトーンが人間を定義して「翼なくして二脚で歩く動物」であるといつた處が、それを側で聞いてゐたプラトーンの師のソークラテスは私かに近處の鳥肉屋に行つて、羽を剥いて裸にした鶏を持て來てプラトーンの前に置いて、子の言ふ通りであれば是も人間であるといはねばなるまいが、如何、と言つたとの事である。併し此句の「兩足尊」は羽を剥いだ鳥ではない。

さて此の「兩足」の語に就て古來學者は説をなして、此處に言ふ「兩足」は人が歩行に使ふ二本の脚足ではなくて、佛の權智と實智との兩徳を指したものであるとか、或は又信と行との兩行を指したものであるとか説いてゐる様であるが、此場合の「兩足」は前句の「天人」の語に對して考へて見ても、矢張り手足の足であらうと思はれる。

以上の二句に於て、龍樹菩薩は禮拜の對象として主佛たる阿彌陀佛の威徳の廣大さを讚嘆し稽首歸命の禮を捧げられてゐるが、次の二句に於て更に阿彌陀佛の在す所と、その周邊に圍繞する聖衆とを擧げて、佛の敬はれる徳を讚へてゐられる。

「在彼微妙安樂國」といふは佛の居りたまふ場所を讚して、「微妙なる安樂の國」と稱讚してゐられる。さてその安樂國といふのは梵語の Sukhāvati (スクハーバティー、須佉婆提)の譯語であるが、此「スクハーバティー」なる原語は「安樂國」の外に「安養土」又は「極樂國」など譯されてゐる。然るに原語に就てその意味を尋ねるに、此語は元來 Sukha と云ふ語の Vati と云ふ語尾の變化が付けられたのであつて、Sukha は「楽しみ」又は「福

ひ」といふ意味を持つ語であつて、その語尾の變化によつて「樂しみる」といふ語になる。そこで原語の意味通りに「樂有」と譯した人もある。淨土の三經には多く極樂といひ、阿彌陀經には佛の在所を説いて

是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂と曰ふ。其土に佛有します。阿彌陀と號す。今現在說法したまふ。舍利弗彼の土を何が故に名けて極樂と爲す。其の國の衆生、衆の苦なく但だ諸の樂を受く、故に極樂と名く

とあることは皆人の知る所である、宗祖は和讃に

妙土廣大超數限

本願莊嚴よりおこる

清淨大攝受に

稽首歸命せしむべし

三塗苦難ながくとち

但有自然快樂音

このゆへ安樂となづけたり

無極尊を歸命せよ

と樂有の世界を憧憬讚仰してゐられる。

龍樹菩薩は以上三句に主佛の徳と報土の徳とを讚禮しつゝ更に第四句に於て極樂聖衆圍繞の徳を讚して、「無量佛子衆圍繞」と言つてゐられる。聖衆即ち佛子は正報の一部にして、佛は發願して淨土を建立するに一國土を

して第一ならしめ、其の衆、奇妙にして道場超絶し、國泥恒の如くにして、等雙なからしめん」と願じつゝその所欲を力精して、所願を満足せられた。故に阿彌陀經には

彼の佛に無量無邊の聲聞弟子有り、皆是阿羅漢なり、是算數の能く知る所に非らず、諸の菩薩衆も亦復是の如し

と説き、宗祖は

彌陀初會の聖衆は

算數のおよぶことぞなき

淨土をねがはんひとほみな

廣大會を歸命せよ

安樂聲聞菩薩衆

人天智慧ほがらかに

身相莊最みなおなじ

他方に順じて名をつらぬ

顔容端政たくひなし

精微妙軀非人天

虚無之身無極體

平等力を歸命せよ

と淨土の衆を稱讚してゐらる。

以上の一頌四句は既に述べた通り、本讚禮偈の總讚禮の文である。その文意を總括して味へば

龍樹菩薩は自ら恭しく拜跪稽首して、彼の安穩微妙の西方安樂國に在して、無數量の佛子、聲聞菩薩の聖衆達に圍繞せられ師として人天に恭敬せられる阿彌陀主佛を敬禮し奉る

との意である。而して、菩薩が是の如く阿彌陀を讚禮せらるゝの眞意は願生廻向即ち自ら西方に願生すると同時に、彌陀の功德が他の諸の衆生に廻向されて自他等しく往生の利益に與かることの爲めである。故に菩薩は以下の各頌に於ても、此首頌の終にあると同じき、「願共諸衆生、往生安樂國」の作願文を付してゐられる。吾人は此作願の文意によつて菩薩の利他の尊き心持ちを窺ふことが出来るが、是が即ち菩薩の心に反映せる佛心の顯現でなくて何であらうか。何んと廣大の佛心ではありませんまいか。

(附記。以下各頌に於ては、冒頭の歸敬文と末尾の願求文を省略す)

二、別 讚 禮

(イ) 主 佛 讚

二、進 止 安 平 の 德

金色身淨如山王

金色の身は淨くして山王の如く

奢摩他行如衆歩

奢摩他の行は象の歩むが如く

兩目淨若青蓮華

兩目の淨きこと青蓮華の若し

故我頂禮彌陀尊

故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

以下第七頌までは主佛たる阿彌陀佛の德を諸方面から讚歎せられたものである。凡て人間の行爲は行住坐臥の四威儀に收めらるゝ。従つて人格的に把握せられるゝ宗教的客體としての阿彌陀佛も自ら身業の德を讚へるに當つては靜姿と動容の二面が表に現はされること當然である。そこで本頌に於ては阿彌陀佛の色身相を讚して身業の德を示すに當り先づ「金色身淨如山王」の句を以てせられたのである。「金色身」といふは同じく菩薩の作なる易行品の偈の中に、佛身を讚して「無量光明慧、眞金色の如し」、「金色妙光明、普く世界に流る」といへる意と同じく佛の色身の妙相を稱讚したのである。又「淨」といふは金色の身相は慧光明淨の德の現はれであつて、無漏の佛身を讚する語である。「如山王」といふは、須彌山が一切の諸山の中で最秀峰であり最高山である所から、須彌(Sumeru)を山王と呼ぶのである。凡て山は不動の意を表す代表的の言葉に用ひらるゝことは、支那の孫子などにも「動かざること山の如し」といふてゐる通りである。今もその如く阿彌陀佛の端然一坐不動の威容を形容した語である。尙大無量壽經には佛の相好を説いて

阿難即ち無量壽佛を見たてまつるに、威德巍巍として須彌山王の高く一切の諸世界上に出づるが如く、

相好光明照耀せざる靡し

と言つてある。是は佛の色身相を不動の姿整について讚したるのであるが、次に

「奢摩他行如象歩」といふのは佛の行歩の動容に於ての讚嘆であつて、「奢摩他」は梵語の Shamatha (シヤイトハ) にして普通「靜寂」又は「寂定」といひ、心の妄想雜念の靜止せる状態を指す言葉であつて、平くいへば「明鏡止水」の境地ともいふべきである。曇つた鏡や動く水の面には物の真相は映らないと同じく、心の作用もその通りで動亂不定の状態では眞實の智慧は得られぬ。そこで佛智の開見には三昧 (Samadhi) (奢摩他と同じく心を一境に安住せしめて動かぬ様にする事) を行するのである。しかもその靜觀の中に一切の真相を看取する時に智慧の方便に縁つて一切の萬象應化し、本處を動くことなくして種々に照應すること、日の天上に在りて地上の萬物を照らし、月の空中に在りて地上の萬川に映るが如く、動靜を失はず、靜動を廢せざること恰も、大象の水を渡るに流るゝ水に動かさるゝことなく、自ら從容とし緩歩しつゝ彼岸に到るが如くである。此の如く動靜互ひに成す處を形容して、「象の歩むが如し」といつたのである。

第三句の「兩目淨若青蓮華」は佛の慈眼の相を讚嘆したものであつて、「慈眼視衆生、猶如赤子」の心である。兩目の清淨さを青蓮華に比したる所以は青蓮華を梵には Dharma (ウバラ、優鉢羅華) といふ、其華狹長にして下に近くに從て小くなつてゐて、上に向つて尖つてゐる。佛眼之に似たりと傳へられてゐる。是は佛眼の淨きことを青蓮華を借りて形容したるものであるが、古人は深く之を味つて、

佛眼圓かに法界を照し、永く無明を離れしむ、之を目淨といふ。亦生死の爲めに染められざること青蓮の如し

といつてゐるが、尊い味い方である。

第四句の「故我頂禮彌陀尊」は如上の如き、佛の尊容に對して恭敬の禮を捧ぐるとの意である。「頂禮」といふは矢張り歸命の譯字であるが、此處には「敬意」といふよりも「禮貌」の意に譯したのであらう。而して「頂禮」とは「頭面禮足」のことであつて足下に頭面を著くる最上の敬禮式である。親鸞聖人が和讚に

信心歡喜慶所聞 乃暨一念至心者

南無不可思議光佛 頭面に禮したてまつれ

といつてゐられるのも此心持ちであると思ふ。又「尊」は「最尊第一」の義にして最上の敬語である。故に「故我頂禮彌陀尊」は至心歸命の表現であつて、各頌の末尾に繰り返して誠意を披瀝し尙、「願共諸衆生」等の文を添へて自他同證の利他心のひらめきを見せてゐられる。

三、面容圓善の徳

面善圓淨如滿目みかほよ 面は善く圓淨にして満月の如く

威光猶如千日月いこう 威光は猶ほ千の日月の如く

聲如天鼓俱翅羅こゑ 聲は天鼓や俱翅羅の如し

故我頂禮彌陀尊こゝろ 故に我彌陀尊を頂禮したてまつる

此頌は佛の容顔と音聲とを稱讚されたのである。初めに、

「面善圓淨如滿月」とあるは佛の面相の圓滿相を讚へたのであつて、古來佛の相好を列舉せる中に、「面滿淨如月」の相が數へられてある。今はそれに相應して面相好善にして圓滿清淨なること十五夜の月の如くに圓妙なる相好を讚へたのである。吾々人間同士の間にも圓滿の面容は福相として人の愛好する所であるが、佛の淨明の面相は盛滿の月の如くなれば、古人は、

「十方より來生するもの、同じく佛面を見て讚すること、衆人の滿月を見て各同じきが如し」といつてゐる。

「威光猶如千日月」といふは佛の光顔魏々たる威容を讚嘆したものである。大經に「威神光明最尊第一」とある如く、威光の熾盛を現はしたのであつて、實は世に於ける日月の光を超へたることを言つたものである。宗祖は光明月日に勝過して 超日月光となづけたり

釋迦嘆してなほつきず 無等々を歸命せよ

と讚嘆してゐられる。

「聲如天鼓俱翅羅」といふは口業功德の讚嘆であつて、「天鼓」といふは讀んで字の如く下界地上の太鼓でなく、三十三天善寶堂前の妙法鼓にして諸天帝釋が樂音を聞かんとする時に、其鼓が自然に聲を發するものと傳へられてゐるのであつて、その音聲は無常法を説くとまで信ぜられてある。又「俱翅羅」といふは原名 Kōkila(コキラ、狗枳羅又は俱香羅)といふ印度の鳥の名である。俗に好聲鳥といはれ美聲を發して囀る鳥であつて天竺時鳥の名があるとの事である。故に「天鼓」といひ、「俱翅羅」といふは如來微妙の音聲を形容した語である。

以上三句は佛の相好に就て、面相、威光及妙音の三を擧げて、専ら表面に現はれたる勝徳を讚したものである。之を吾々人間の場合に就て考ふるときは和顔愛語の徳といふべきであつて、最も大切に心掛くべき事柄である。龍樹菩薩はこの佛の身口の勝徳を讚へて頭面禮を捧げてゐられる。

四、威光折伏の徳

觀音頂戴冠中住 觀音は頂戴し冠中に住せしむ

種々妙相寶莊嚴 種々の妙相の寶にて莊嚴す

能伏^ニ外道魔憍慢^一 能く外道と魔と憍慢^{けうまん}とを伏す

故我頂^ニ禮彌陀尊^一 故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此頌は外相折伏の徳を讃嘆せられものである。

「觀音頂戴冠中住」の句に於て、觀音と云ふは梵に Avalok teshvara (アバロキテシュバラ、阿婆盧吉低舍波羅) といひ、正しくは「觀世自在」と譯すべきであるが、普通に「觀世音」或は略して「觀音」と稱せられてゐる。

「觀音」は「勢至」と共に阿彌陀佛の左右に相待する菩薩である。而して觀音菩薩はその頂上に戴ける寶冠の中に、彌陀の尊像を奉安してゐられることは大乘莊嚴寶王經の中に、觀音菩薩を讚歎して

種々莊嚴の妙色身、首髻天冠は衆寶を嚴る。彌陀一切智を頂戴し、有情を救度すること無數な

りといひ、又觀無量壽經には同菩薩の身相を説いて

頂上には毘楞伽摩尼寶^{びりやうがまにほう}を以て天冠とし、其天冠の中に一の立化佛あり高二五由旬なり

と述べてあることによつて知らるゝ。その他諸經に於て觀音菩薩の相好を説くものは皆彼寶冠中に彌陀佛を頂くことを説いてゐるから、龍樹菩薩は諸經に依て此句を作されたのであると思はれる。しかもその觀音寶冠中に住し給ふ一立の化佛の相好は種々の妙寶莊嚴を現はすが故に「種々妙相寶莊嚴」といひ、その冠中の化佛たる阿彌陀佛は種々の妙好の寶莊嚴を示して外道諸魔の障碍を降伏折破するのであるから、第三句に

「能伏外道魔憍慢」といつてある。外道とは佛教以外の教學のことであつて古來六師外道又は九十五種の外道など、各派の區分が數へられてゐる。要するに佛教からいへば異解又は邪偽の教である。魔は梵の Māra (マール魔羅) であつて、「物を殺す」意の字である。故に字面に就て「殺者」又は「奪命」など譯されてゐるが、意味を擴充して「障礙」の譯語もある。要するに凡て「善を破壊し、惡を助長する」ものを指すことになつてゐる。又「憍慢」は自らを尊高にし他を卑下する慢心であつて修道を妨げ入信を障へるものである。人は多く外道の邪見に欺かれ、諸魔の誘惑に罹り、憍慢の心の爲めに佛智を信ずることが出来ない様にされてゐる。是宗祖が

邪見憍慢の惡衆生は信樂を受持すること甚だ以て難し

と嘆ぜられた所以である。

されば觀音菩薩が冠中に彌陀佛の尊像を戴きたまふ所以は、一には彌陀の威徳の廣大なることを示し、二には謙敬開奉行の經語の如く、自ら卑謙の姿を示して邪見憍慢の心を折伏し、報佛恩の意を現はし、以て如來の威光が能く魔障を除く力あることを現はさんが爲めに外ならない。吾々無慚無愧の徒は須らく觀音菩薩の謙敬の態度に學んで龍樹菩薩と共に彌陀尊を頂禮したてまつらねばならない。

五、溫容攝受の徳

無比無垢廣清淨

無比無垢にして廣清淨なり

衆德皎潔如虛空

衆德皎潔にして虚空の如し

所作利益得自在

所作の利益は自在を得たまへり

故我頂禮彌陀尊

故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此頌は彌陀主佛の自利利他の徳相圓滿せることを嘆ぜられたものである。

「無比無垢廣清淨」とは、次句の「衆德皎潔如虚空」の中の「衆德」を分ちて讚嘆したものであつて、その「衆德」といふは如來に具はる衆多の徳であつて、茲には無量光佛たる阿彌陀佛の十二の光徳を指したものである。

故に「無比」といふは「比びなき」の意なれば無對光、炎王光、超日月光、無稱光の徳相、無垢は貪、瞋、癡の三垢を離れたる意なれば、清淨光、歡喜光、智慧光の徳相、「廣」は廣大難思の義なれば、無邊光、無碍光、不斷光、難思光、無量光の徳相を指すものであつて、此光明は何れも清徹分明にして到らざる處なく、照さざる物なきが故に、「清淨」、「皎潔」にして「如虚空」と稱嘆されたのである。宗祖は和讃に如來の光明の徳を讚して

光雲無碍如虚空

一切の有礙にさはりなし

光澤かふらぬものぞなき

難思議を歸命せよ

と讚嘆してゐられる。

「所作利益得自在」といふは光明の神力、能く破闇滿願の利益を被らしむることをいへるものであつて、和讃は

無碍光佛の光には

清淨歡喜智慧光

その徳不可思議にして

十方諸有を利益せり

とあるはその意である。「自在」といふは、龍樹菩薩は易行品に

彼八道の船に乘じ、能く難度の海を度す、自ら度し亦彼を度す、我れ自在人を禮したてまつる

と言はれてある通り、自利利他の二行を全ふするの意である。和讃には又此意を述べて

生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめる我等をば

彌陀弘誓の船のみぞ

のせてかならずわたしける

といつてある。かゝる不思議の徳あるが故に菩薩は、

「故に我れ彌陀尊を禮したてまつる」

と讚禮してゐられる。

六、住持成就の徳

十方名聞菩薩衆

十方に名聞ゆる菩薩衆と

無量諸魔常讚嘆 無量の諸魔常に讚嘆したてまつる
 爲諸衆生願力住 諸の衆生の爲めに願力に住したまふ
 故我頂禮彌陀尊 故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此偈は本願住持の徳を讚したるものであつて、前偈が如來の光明の徳を讚嘆したるに對して壽命の徳を讚歎したものと見て宜しいのである。

「十方名聞菩薩衆」とは自利利他の行を滿たし、その名聲十方に聞ゆる多くの菩薩といふ意味である。(一説には「十方名聞」を「十方に名が聞へて」の意に解し、その名を聞いた菩薩衆と見る。此見方によれば「名」は「諸佛に稱揚さるゝ彌陀の名」である) 此句は次句と連続して讀むべきである。

「無量諸魔常讚嘆」とは「魔」は本來は善を妨げ惡を助くるものであれば、佛に逆ふべきであるに、佛の威徳の前には衆魔悉く畏伏し、却て佛徳を讚嘆するの光景を述べたものである。此くて彌陀佛は獨り十方の菩薩衆のみでなく無量の諸魔までが讚嘆する大威神者であり、順逆齊しく歸する大威徳者であることを稱讚したのが上の二句である。

次に「爲諸衆生願力住」とは、一切の衆生が如來の願力に住持されて助けられ、生かされるの意であつて、諸の衆生の爲めに如來は本願を成就し、本願力を常に支持し給ふが故に衆生はその願力に支持されて往生を遂ぐる。

即ち和讃に

本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき
 功徳の寶海みちく 煩惱の濁水へだてなし

如來淨華の聖衆は 正覺のはなより化生して
 衆生の願樂ことくく すみやかにとく満足す

といへるは此の意である。又一切の衆生を度する爲めには、如來は常に世に住したまふが故に壽命の延長は測ることが出来ない。即ち如來に無量壽の徳ある所以であつて、此徳力を讚嘆して「願力住」といつたのである。要するに、永劫に亘りて斷へざる如來の救濟を可能ならしむる願力住持の徳を讚して、頂禮せられるのが本偈の意である。

七、華臺妙淨の徳

金底寶間池生華 金底寶間の池には華を生ず
 善根所成妙臺座 善根所成の妙臺座なり

於_二彼座上_一如_二山王_一 彼の座上に於て山王の如くまします
故我頂禮彌陀尊 故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此偈は主佛の妙華臺座を讚歎したものである。即ち佛の位座を讚嘆することによつて、佛徳の高く且つ大きいことを示されたのである。

「金底寶間池生華」とは、極樂寶池の説明であつて、「金底寶間池」とは金沙を布きつめた池の底に種々の寶が間雜してゐるとの意。即ち「寶間」とは種々の寶が間つてゐること（間は「まじる」の意）であつて七寶合成の池底といふことである。「生華」といふは、その七寶合成の金底の池中に蓮華の臺座の生ずるを云ふのであるが、その蓮華は普通の泥水池に生ずる蓮根より生ずるものではなくて、次句に説く

「善根所成妙臺座」即ち「善根所成」の妙華臺座である。然るに此に「善根」といふは、「出世の善根」にして無漏の佛果、正覺の妙位を成就せしむる願力の所成である。言ひ換ゆれば大慈大悲の佛智より生ずるものであつて、世間の泥中の蓮華とは全く趣きを異にしてゐる。天親菩薩が淨土論に

如來淨華の衆は正覺の華より生ず
といへるも此意である。

「於彼座上如山王」といへるは阿彌陀佛は、彼善根所生、正覺所生の華臺座上に山王の如く一座不動の威容を示

して安座したまふてゐるとの意である。此處に「山王」といへるは第二偈の首句に在つた「金色身淨如山王」といつてある氣持とは聊か異つてゐる。それは、前に「山王」といつたのは身相の「金色清淨」を主とし、今は安坐不動の姿整を主とし、特に阿彌陀が諸佛に勝れて嚴然たる威容の輝くものあるを思はしむるからである。それら一切佛皆蓮華に坐するは生死の游泥を出で、二乗の濁水に秀づることを表示するのであると古人は説いてゐる。

かくの如く威容端嚴の相を示したまふが故に特に龍樹菩薩は頂禮し奉るといつてゐられる。

(ロ) 伴 衆 讚

八、顯現神通の徳

十方所來諸佛子 十方より來る所の諸の佛子は

顯現神通至安樂 神通を顯現して安樂に至り

瞻仰尊顏常恭敬 尊顔を瞻仰して常に恭敬す

故我頂禮彌陀尊 故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

以下本偈と次の偈とは主佛たる阿彌陀佛に伴隨する佛子衆の讚嘆であつて、此偈は特に聖衆の神通の徳を稱嘆したものである。

「十方所來諸佛子」とは讀んで字の如く、十方より來集する數多の佛子即ち菩薩衆を指し、「顯現神通至安樂」とは句の表面に従て解すれば十方より來集する諸佛子が各その具得せる神通力を顯はし、之に由つて來りて安樂國に到るが如くなれども、大無量壽經の東方の偈に由るに、

諸佛は菩薩に告げ、安養佛を觀、法を聞き、樂たがふて受行し、疾かに清淨處を得せしむ。彼嚴淨國に至れば
便ち速かに神通を得、必ず無量尊に於て、受記して等覺を成ず

とあれば、「顯現神通」といふは菩薩自己の神通力を顯して來集するに非らずして、佛の本願力に乗じて一念の頃に來生し、到り得て速かに神通を得ることをいつたのである。蓋し彼の佛の國土は願力成就の報土なれば、十方の菩薩衆が如何に身に神通の力を具するとも、彌陀佛の本願力に乗ずるに非らざれば到ることを得ないからである。故に宗祖も和讃に

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば
大小聖人みなながら 如來の弘誓に乗ずなり

と述べてゐられる。

すべて神通とは梵語の Abhiṣṭa (アビシュナー) の譯語にして神變不可思議にして無礙自在なる通力との意である。普通六種の神通力を數へる。(一)天眼通(自在に一切を見分ける通力)、(二)天耳通(自在に一切を聞き分ける通力)、(三)他心通(他人の心の中を見通す力)、(四)神足通(何處へでも飛び行ける不思議なる足の通力)、(五)漏盡通(一切の漏即ち煩惱を斷ち盡してゐること)、(六)宿命通(宿)即ち過去に於ける「命」即ち生涯の事を知る通力)をいふ。是等皆菩薩が具ふる心徳をいふのであるが、畢竟するに佛の本願力が然らしむるのであつて、四十八願中の宿命智通乃至漏盡智通の願成就の故である。

「瞻仰尊顏常恭敬」といふは如上の神通具足の諸菩薩が、尊顏即ち光顏くわうげん々々たる如來の尊容を仰いで、衷心思慕の念溢れて晝夜に恭敬し長時に慈恩を報ずるの相を示すことである。かゝる威光の彌陀を仰ぎつゝ龍樹菩薩は頂禮の敬意を捧げられたのである。

九、爲衆說法の徳

諸有無常無我等 諸有は常なく我等なし
亦如水月電影露 亦水月と電と影と露との如し
爲衆說法無名字 衆の爲めに名字の無きことを説く

故我頂禮彌陀尊

故に我れ彌陀尊を禮したてまつる。

此偈は彌陀の伴衆たる菩薩の說法の徳を讚嘆したものであつて、初の二句、即ち

「諸有無常無我等、亦如水月電影露」といふは菩薩の說法善く諸行無常、諸法無我、一切皆苦等の理を盡くして、常樂我淨の顛倒迷惑の蒙を啓くことを讚嘆したものである。即ち「諸有」といふは「諸の有爲即ち世間に生滅起伏する一切の森羅萬象」を指し、「無常」といふは是等の諸法は皆絶へず變化して刹那も住まることなき有様を云ふのであつて、諸行無常とは即ち是の謂である。又「無我等」とは詳しくいへば、諸有は我なく、淨なく、樂なしとの意である。即ち諸法は無我にして、一切は皆空又世間の法は皆無常にして悉く苦なることの眞實を言ふたのである。蓋し諸法は因縁由つて生滅するが故に世には常住不變の者はなく、固定不易のものもない。従つて常變化、常流轉であつて、人が自己の意志を以て左右することは出来ない。故に生滅して止まざる點より見れば萬物は皆空であり、意の如くならざる點よりすれば、一切は皆苦である。その眞理を事例を借りて示したのが第一二句の

「亦如水月電影露」である。是は諸法無常無我等の意味を譬説したものであつて、「水月」とは「水中の月影」であつて諸法の實有なき有様を「水に映れる月の影」に例へたのである。又「電」といふは「雷光」をいふのであつて、世間にも「電光石火」の語もあるごとく、生滅する相の疾速なることを示す爲めに引喩したもので、諸

行無常の意を示したのである。「影」は「物が光を遮る時に生ずるもの」であつて、物異れば影異なり、物動けば影亦動く、従て影は自體なくして流動止まないものであるから、一切世間の萬象の無常にして無我、實有なくして皆空なる姿を善く示すものとして擧げたのである。又「露」は夕陰に由つて凝結し、朝陽に逢ふて忽ち消散し、恰も水上の泡、空中の華の如きものである。従て是亦、世間の無常無我の相を示すものである。

此の如く世間はその生滅の相に就て眺むる時は水月電光の如く、陰影、朝露の如きものである。此世間無常無我等の理を説くのが第三句の

「爲衆說法無名字」の意であつて、菩薩說法の要諦である。即ち衆に法の眞實を説いて名字なきことを知らしむるのである。さて此「說法無名字」といふは華嚴經には

法性は本空寂にして、取なく亦見なし。性空即ち是れ佛、思量し得べからずと説かれてあり、又龍樹菩薩が大智度論に

一切世間の法は、因果にして人無し、假名の故に有るを除く、此是正思量といへる所に由て味ふ時は、萬物は皆夫々の形色あり、従てそれに對する名稱を付するも皆悉く暫有假設の存在であつて固定の實體はない。唯見らるものは因縁による變轉の相のみである故に、假名を付した相はあるもその假に呼ぶ所を除けば實體無しとの意である。それで菩薩の說法は名字を假りて名字のものゝ無きことを明かすの

である。此等世間無常無我等の意味を最も平易に説いたものが、「いろは」四十八字の歌詞である。彼「いろは歌」は古來弘法大師が、涅槃經に在る

諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂

の四句偈を和譯せるものと傳へられてある。即ちその意は

いろはにほへどちりぬるを（諸行無常の意）

わがよたれぞつねならむ（是生滅法の意）

うゐのおくやまけふこえて（生滅滅已の意）

あさきゆめみしゑひもせす（寂滅爲樂の意）

である。石州の芳淑院履善師は、この「伊呂波歌」の注を書き、此の歌詞に添へ言葉を加へて、一首の長さ歌に作り爲してその意を分り易くせられてゐる。即ち、

咲花の。いろ（色）はにほ（匂）へと傾がて又。ちり（散）ぬる者をわかよ（我世）には。たれ（誰）そつね（常）なる者あら（有）む。いざ此うゐ（有爲）のおくやま（奥山）を。けふ（今日）こゑ（越）出で。あさ（淺）はけき。ゆめ（夢）は又み（見）し。明り無き。酒には元よりゑひ（醉）さめ（醒）もせす。と。平易なる菩薩の説法の語として、深く味ふべきである。

かゝる眞理の常説法をなす菩薩衆に恭敬さる彌陀尊であるから、龍樹菩薩も自ら頂禮し奉るといつてゐられる。

(ハ) 國 土 讚

十、不聞惡名の徳

彼尊佛利無惡名

彼尊かのそんの佛利ぶつせつには惡名あくみやう無く

亦無女人惡道怖

亦女人おんなと惡道おそれの怖なし

衆人至心敬彼尊

衆人至心に彼の尊を敬ひたてまつる

故我頂禮彌陀尊

故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此頌と次の頌とは彌陀佛國の土徳を讚歎したものである。先づ

「彼尊佛利無惡名」とは、彌陀佛の國土には、惡名即ち他を譏り嫌ふ様な惡聲を發し惡名を立つるものはないとの意である。「彼尊」は彌陀尊であり、「佛利」といふは佛國又は佛土といふと同じい。刹は梵語 Kshetra (クセー) トラ)の音譯であつて「土地」の意義である。「惡名」は他人を誹譏する様な言葉であつて、彌陀は四十八願の中第十六の願に「不聞惡名」の願を建立して、彼佛國には不善の名の聞ゆることなからしめんと誓はれてある。「亦無女人惡道怖」といふは、彼佛利には女人又は趣に導く誘惑の道の怖なしとの意である。佛國に「女人」な

しといふことは奇異に感ぜらるゝが、由來世間では女人としいへば邪惡の道へ誘惑する惡魔の手である如く思ひ爲してゐた時代もあつた。否、現代でも左様な見方をして女人を眺めてゐる人もあるだらう。又左様な魔女もあるであらう。併し邪惡へ誘引の魔手は必ずしも女人ばかりではない、男子にも女子以上に魔手を揮ふものがある。又女子とても聖觀音の如き慈眼以て人を視、慈心以て人を誨へ、慈手以て人を導くものが少くない。但し世には男女に就て偏見妄執の爲めに、誤つた男尊女卑の僻見に囚はれてゐる人も多いが、吾人は男女を正しく視、又男女の關係の上にも淫りな想を抱き、邪しな行を爲してはならぬ。男女は元より平等にして、互に敬愛を盡さねばならぬ。佛國に女人なしといふは、世の人の淫りな心に映る女身の姿、佛子の心には映つることなきが故に、此見地からしても世間に於ける女人の有無とは大に趣きを異にしてゐると思ふ。それに彌陀は四十八願の中、第三十五願に於て變成男子の願を建立し、彼國土には他世界に於けると同じ女身の像を保つものなからしめんと誓ひ給ふてあるから、彼國土には人間界裡の女子と同じ身像の女子はないのである。

さてかゝる國土の徳があるから第三句に

十一、往生不退の徳

彼尊無量方便境 彼の尊の無量方便の境は

無有諸趣惡知識 諸の趣と惡知識有ること無し

往生不退至菩提 往生不退なれば菩提に至る

故我頂禮彌陀尊 故に我れ彌陀尊を頂禮したてまつる

此頌は前頌と同じく佛國の徳を讚歎したものであつて

「彼尊無量方便境」といふは總じて彼土を稱讚した句であつて、彼尊即ち彼彌陀の在します佛土は無量の方便の徳を具する境界であるとの意である。

さて「方便」といふは曇鸞大士が、

正直を方といひ、己を外にするを便といふ

と解釋してゐられる通り、何等掛け引きなく、術策を用ひず、有るが儘の事情に應じて、自己を外にし他人の爲にすることである。従て西方佛國の建立に際して、彌陀は救濟の對手である一切衆生の心情を正直に看取し何等の加減も施さず、衆生の有るが儘の事情に應じ、しかも自己の爲ではなく全く一切衆生の爲に往生の出来る様に仕上げられたのである。此くて西方淨土の位も各種莊嚴の相も皆是れ彌陀の度衆生の爲の方便であつて、彼土は眞に無量方便の方便である。従て、此「方便境」に於ては一切が彌陀の方便力の所現なれば、本願に違へる惡趣

や悪知識の有るべきでないから、次句に

「無有諸趣悪知識」といつてある。諸趣は五趣（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五界）六道（上の五界に天上の一界を加ふ）であつて迷界なれば悪趣と呼ばれる。然るに彼尊の方便境は横に五悪趣を截り、悪趣自然に閉ぢたる境なれば「無有諸趣」といつてある。「悪知識」といふは「善知識」に對する語で「悪師友」であつて悪道に導き悪趣に誘ふものである。佛説善生子經には世間の善惡の知識を類別して次の如く擧げてある。即ち

悪知識の四種

- 一、内に怨心あれども、外に強いて知識となる。
- 二、人の前に於て好言し、背後にては悪言す。
- 三、急ある時にあたり、人の前に愁苦し、背後に歡喜す。
- 四、外に親厚の如くして内に怨謀す。

善知識の四種

- 一、外は怨家の如くして、内に厚意あり。
- 二、人の前にては直諫し、外にては人の善を説く。
- 三、病み煩ひの時驚き恐れて之を救ふ。
- 四、人の貧賤を見て棄てず、方便を求めて之を富まさんと欲す。

である。

宗祖は愚禿抄に、悪知識とは

假善知識、偽善知識、邪善知識、虚善知識、非善知識、惡善知識は惡性の人也

と示してゐられる。要するに世間道德の道行く人を邪道に誘ふは世間の悪知識、念佛を行する人を譏るが如きは宗教上の悪知識である。今は此種の悪知識が世に満つる爲めに白法隱滞の悲みに堪へないものがある。宗祖が時弊を歎いて

五濁の時機いたりては 道俗ともにあらそひて

念佛信する人をみて 疑謗破滅さかりなり

と述べてゐられるれば悪知識の多いこと今も昔も同じきことを思はしめらるゝ。

「往生不退至菩提」といふは彼土の徳として彼土に願生するものは往生即成佛の徳を得ることである。而して不退といふは Avaitarika (アヴィヅルチカ、阿鞞跋致又は阿惟越致) の譯語にして又「不退轉」ともいふ。「往生」といふには二義があつて、若し之を現生に約するときは「心不退」といはれ、經に「即得往生、住不退轉」と説かれたる心持ちである。又若し生後に約するときは「處不退」であつて、「難思議往生」である。「至菩提」

といふは、「必至滅度」の益として臨終一念の夕に大般涅槃を證することである。一體「菩提」は Bodhi といふ梵語の音譯にして「覺」又は「智」の義である。即ち「佛の正覺の智慧」を指すのである、故に詳しくは、Anuttara-Samyak-Sambodhi アヌッタラサンミヤクサンボドヒー（阿耨多羅三藐三菩提）といふべきである。その中 Anuttara（阿耨多羅）は「無上」の意、Samyak-Sambodhi（三藐三菩提）は「正徧智」の意であつて、「完全なる佛の智慧」と云ふ意味である、従つて「至菩提」といへば此佛の「無上正徧智」を得ることであつて、完全なる成佛することである。故に彼土に至るものは往生と同時に成佛の結果が得られるのである。是は即ち佛土の徳であつて崑崙の山中に投ずれば瓦礫も變じて黄金となると言はれる通り、凡夫の身を持つ吾人が、信一念の當體に往生の業事成辨せられ、此土に在る間は、心不退の益に與りて、「即得往生、住不退轉」の身として、正定聚の分人として生活を續け、更に臨終捨命の夕には「捨此往彼」して彼土に於て難思議往生を遂げ「處不退」の徳によつて永しへに滅度の位に住することを得るは誠に喜びの中の喜び、幸ひの中の幸ひである。しかし彼土の菩薩は無上の正徧の智慧を具する身として、常に利他の巨益を施さんが爲に或は還り或は往き、有縁を度して休息なきが如く、一切の往生人も亦、大悲心を起して利他の行を全ふすることを得。されば宗祖は和讃に

願土にいたればすみやかに 無上涅槃を證してぞ
即ち大悲をおこすなり 此を廻向となづけたり

と彼土の徳を讚歎してゐられる。

かゝる廣大の徳あるが故に龍樹菩薩は頂禮の至心を披瀝してゐられるのである。

三、結 嘆 文

十二、自利利他の徳

我説_ニ彼尊功德事_一 我れ彼の尊の功德の事を説く
衆善無邊如_ニ海水_一 衆善無邊なること海水の如し
所_レ獲善根清淨者 獲る所の善根清淨なる者を
廻_ニ施衆生_一 衆生に廻施して彼の國に生ぜん

此頌は本偈最終の頌にして廻向句といはれてゐる詰嘆の文である。故に第一句

「我説彼尊功德事」と言つて上來列述して來た阿彌陀佛及びその聖衆及國土の功德の事を總じて説き、更に

「衆善無邊如海水」と詰嘆してゐられる。而して次句に

「所獲善根清淨者」と標示して、特に「善根清淨」の何であるかを心竊かに思ひ浮べてゐられる氣持を伺ふに、

それは言ふ迄もなく曇鸞大師の言へる如く

「阿彌陀如來の方便莊嚴眞實清淨功德の名號」(論註)

である。然るに此名號は彌陀より廻向されたる御名であつて、龍樹菩薩が獨り私すべきではないから、更に

「廻施衆生生彼國」と誦出して「願共諸衆生、往生安樂國」の意を述べてゐられるのである。而して宗祖が

南無阿彌陀佛をとけるには 衆善海水のごとくなり

かの清淨の善身にえたり ひとしく衆生に廻向せん。

と述べ、更に又

無慚無愧の此身にて まことのこゝろはなけれども

彌陀廻向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ

と喜び讃へてゐられるのは全く本頌の意と符合するのである。

此最後の頌は如上の諸頌に分讃せし諸功德を總約し、しかもその功德の無邊なること海水の如しと絶讃し、此無邊如海水の功德藏たる名號を廣く十方世界に流行せしめ、諸有の衆生に回施して一切の人々と共に彼安樂國に往生せんと禮讃し作願しつゝ本偈を結んでゐられる。廣大無邊の龍樹菩薩の願心の現はるゝ處に彌陀の大悲心が伺はれて我等亦た彌陀尊を頂禮せずにはゐられないのである。

四 附説 宗教の本質と禮拜

本偈は龍樹菩薩が至心に阿彌陀佛に歸命し、深く西方の往生を念願する餘り、特に阿彌陀佛に對してその威徳を讃し、恭敬の禮拜を捧げる至情を吐露せる讃歌であるから、菩薩の純眞なる宗教心の發露と見るべきである。

凡そ人の宗教的意識の中には必ず宗教的客體たる佛(又は神)を存せなくてはならない。その故はすべての宗教的現象はその機能を擔任する主體の外にそれが向ふ處の客體あつて始めて生じ來るものであるが故である。而して人なる主體が、佛(又は神)なる客體に交渉をなす爲めには必ず如何なる様式に於てかその客體を想念することが必要である。佛(又は神)に關して何等の想念なき處には宗教はなく、之を想念せざる人には宗教心は起らない。此見地からいへば、佛(又は神)の想念は宗教的機能の出發點であるといはねばならぬ。それに又宗教的機能を發揮し尙又増進せしむる動機も亦此想念によるが故に、宗教的生活の如何も全く此想念の如何によるとせねばならぬ。

然らば宗教的機能を發揮する爲には佛(又は神)の想念は如何なる性質を具備すべきか、換言すれば宗教的客體たる佛(又は神)は人によつて如何に考へられるものであらねばならぬかといふに就て、獨逸の哲學者ハルト

マンがその著『宗教哲學』に

寫象が宗教機能の前提たるには必ず先づ過境的の意義と價值を有するを要す、即ち過境的意義に於て眞實なりとせられなくてはならない。若しその寫象が單に含蓄的な意識の内容に止まりて、之に相應する過境的實在と交渉せず、又その實在を信ぜないならば、決して宗教的關係を建立するに足ないであらう。若し人がその意識の内容には相應の實在なきを知つたならば、此の如き主觀的產物に對して宗教的關係を結合することはなかるべきである。(姉崎氏譯より抄出)

といつてゐるのは誠に善く宗教的客體に對する想念の性質を説いたものである。此點に於て「唯心の彌陀」「己心の淨土」といふが如き思想が、宗教的客體としては全然不完全否不合理であることを思ひ當るべきである。

此の如く宗教的客體としての佛(又は神)は主觀に於ける單なる含蓄的意識内容でなくて、その之に對する客觀的實在であらねばならぬ。否少く共、しか信ぜらるゝものでなくてはならない。その故は、若し客觀的實在でない主觀的構想的觀念の客體に對して宗教的關係を結ばんとするも、それは宗教的關係を一種の迷妄又空想に歸するものであつて、人間の知識は之を排除するからである。此くて

「人の寫象が總て過境的の意義價值なからんには、如何に之を僭偷するも之を宗教的關係の基本となすことは出来ない」

といへるハルトマンの言は一層に力強く感ぜらるゝ。

此の如く宗教的客體としての佛(又は神)は、主體に對して客觀的實在たるべきは上述の如くであるが、更にそれは主體に比して劣等の地位に在るものであつてはならないのみならず、同等の人間であつてはならない。此點に關してもハルトマンの左の所説は善く要領を盡してゐる。

主體自己を客體とする機能、例へば理論的自覺、幸福主義の主我、純粹に道德なる良心の如きは、宗教的でない。若し又自己を客體とするものにして宗教的なるべきものあらんには、そは他の宗教的なる者の結果產物に外ならない。即ち宗教道德的良心が自己を宗教的見地より裁判定するが如きは、單に自己が自己を客體とするものに非るや明なり。

劣等の生物等が人間に宗教的客體となる能はざるは明である。然れども動物、木石等を神聖として崇拜する場合の如きは其崇拜者は動物、木石其物を拜するにあらずして其中に高尚なる者の代表表象せらるゝと信ずるからである。宗教的客體は主體と同等ではない。某の人が宗教的客體とせらるゝが如きは、構想が此人をして甚だしく卓越せしめしが故なるか、若しくは幸利の爲めに眩まされて自ら欺けるによるのである。此故に宗教的と稱すべき機能の客體は主體に卓越し、特に同等人類中の優劣の如き卓越にあらずして、異等の本體に對する絶對の卓越でなくてはならない。即ち人類の宗教的客體なるものは人に卓越したる者

である。吾人は之を稱して神と呼ぶ。今茲に神といふも他の意義を混ぜざるものと知れ、宗教的客體は總て神である。

上述の如く、宗教機能の出發點は佛（又は神）の想念である。従つて宗教的意識は佛（又は神）の想念を内容とせる心情を發露せしむるもので、その動く方面は、内に在つては憶念觀相の意義、外に現はれては屈敬の身業即ち禮拜と、稱名讚歎の口業即ち稱讚とである。而して此身口意の三業に亘つて發動する宗教的意識の客體に對する全心依托が歸命であつて、その歸命の全身表現が恭敬即ち禮拜である。故に此見地よりすれば宗教は禮拜なりと言ふことが出来る。されば彼佛教實踐の過程を分ちて五念門を開列せし曇鸞大師が、天親菩薩の一心歸命の偈句を釋する當り、歸命は是れ禮拜なりといつてゐられるのは眞に至言である。勿論歸命が禮拜であるといふは、禮拜は歸命なりとの反言を是認するものでないことは言ふ迄もないが、併し、歸命には必ず禮拜を伴ふことは事實である。従て、龍樹菩薩が本偈の冒頭に「至心歸命」の意を告白し、次に「禮西方阿彌陀佛」と誦出してゐられる處に、菩薩の宗教心の内外全面の表現を見ることが出来る。尙各頌の結句として、「故我頂禮彌陀尊」と反覆丁寧に敬禮の意を表せらるゝ處に、菩薩が阿彌陀佛を眞實過境的實在の宗教的客體としてその尊嚴さを仰がれてゐることがよく窺ひ知られて誠に尊く感ぜられ、本偈頌が宗教心の本質と禮拜との關係を最も善く示してゐることは注意すべきことと思ふ。

聖典講讀全集第六回配本・昭和十年五月十一日印刷・昭和十年五月廿一日發行・編輯者宇野圓空・發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎・印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎